

発達障害教育情報センター 研修講義

ADHDとは何か？

— 医療から見て —

国立特別支援教育総合研究所
東京都立梅ヶ丘病院 市川宏伸

子どもが変わってきている？

- ・友達を作るのが苦手である
- ・思考の柔軟性に欠ける
- ・コミュニケーションのとり方が分からない
- ・興味の持ち方に偏りがある
- ・感覚の感受性が特別である
- ・学習上の困難を抱える(知的障害と無関係)
- ・注意が持続しない
- ・自己抑制が苦手である

ADHDの定義

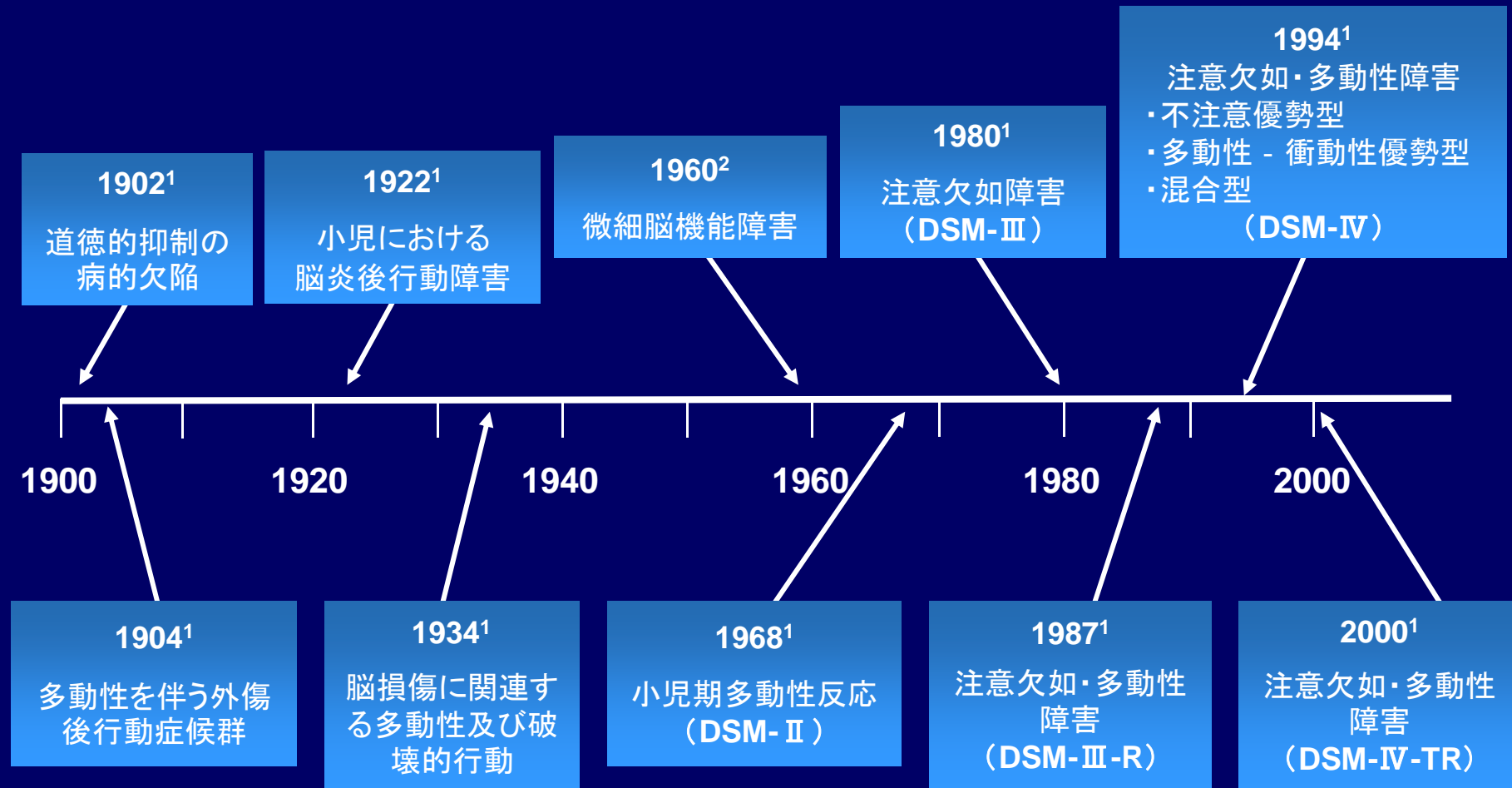
以下の症状を呈する発達障害



不注意

多動性-衝動性

ADHDの歴史的変遷



1. Attention-deficit/hyperactivity disorder – historical development and overview [editorial]. *J Atten Disord* 2000;3:173-191.
 2. Stubbe DE. *Child Adolesc Psychiatr Clin N Am* 2000;9:469-479.

AD/HDと診断

ICD - 10	DSM - IV - TR
F90 多動性障害 Hyperkinetic Disorders	注意欠陥/多動性障害 Attention-Deficit/ Hyperactivity Disorder
F90.0 活動性および注意の障害	314.01 注意欠陥/多動性障害、 混合型
F90.1 多動性行為障害	314.00 不注意優勢型
F90.8 他の多動性障害	314.01 多動性-衝動性優勢型
F90.9 多動性障害、特定不能のもの	314.9 特定不能の注意欠陥/ 多動性障害

間違えやすいのは・・・

- 1 正常範囲内の多動
- 2 不適切な環境因による多動
- 3 広汎性発達障害の一部
- 4 知的障害による多動
- 5 行為障害の一部

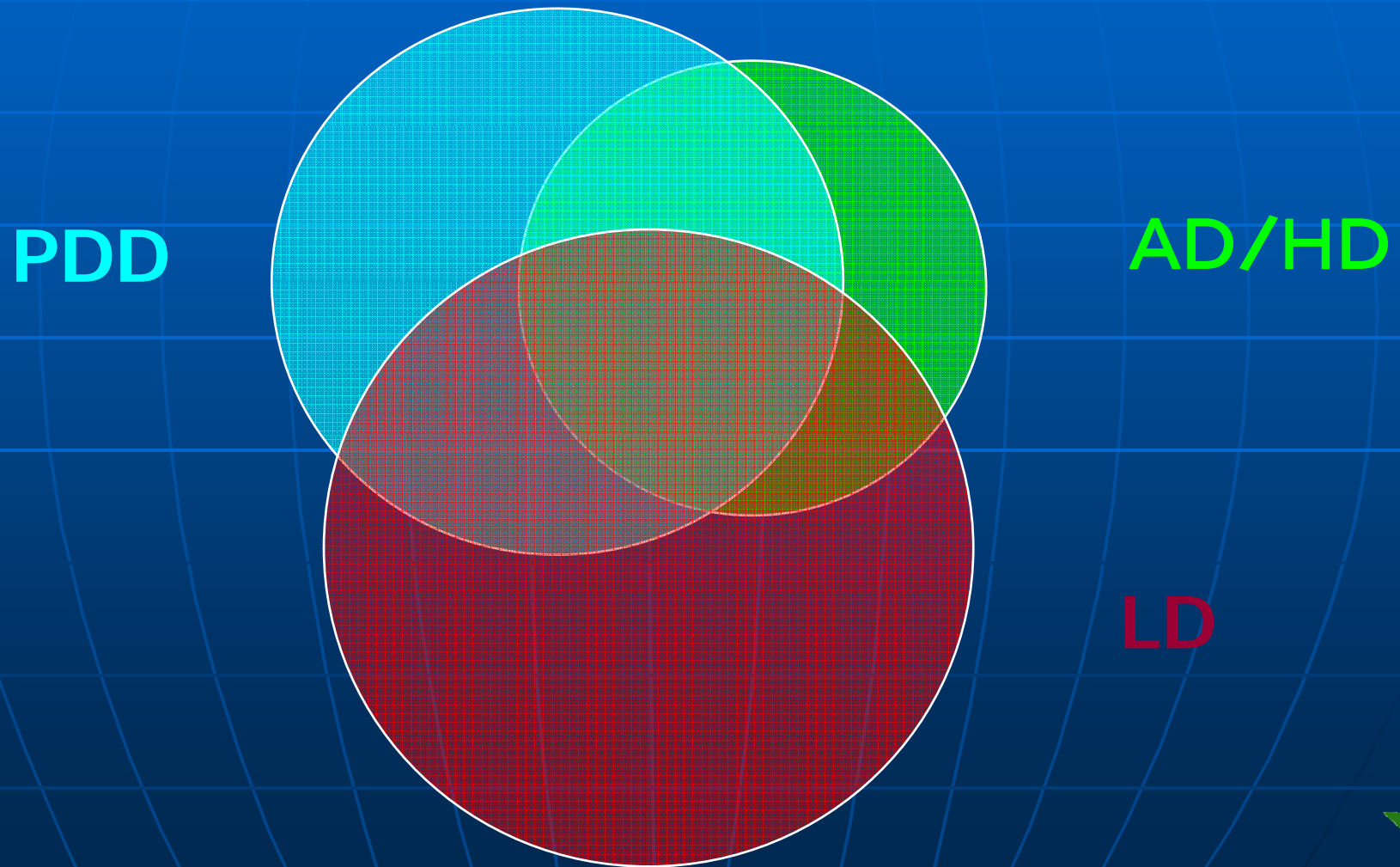
合併しやすいのは・・・

- 1 学習上の困難：
教科による、教科内のバラツキ
- 2 発達性協調運動障害：
極端に不器用
- 3 チック障害：
全身の不随意運動・発声
- 4 強迫性障害：
こだわり行動

最近は・・・

- ADHDと広汎性発達障害(PDD)が重なっていると考えられる子どもも少なくない
 - ADHDと診断した子どもの経過を見ていくとPDDの診断基準を満たすことがある
 - 両方の特徴を兼ね備えていると考えた方が対応がうまくいく場合もある
- * 医学診断では、両方が存在する場合はPDDが優先する

LDとPDD、AD/HD(模式図)



ADHDの治療とは

- ・教育的支援が第一
 - 低下している自己評価の改善
 - 根強い劣等感の払拭
 - 自分の存在感の獲得
- ・医療における支援も有効なことがある
 - 的確な医学的診断
 - 薬物是对症療法的手段

ADHDと薬物治療

- 症状を一時的に軽減する対症療法的手段
- 不注意、多動・衝動性に中枢神経刺激薬が使用される
- 二次的に生じる興奮や乱暴には抗精神病薬、気分の変動には気分安定薬、抑うつや不安には抗うつ薬や抗不安薬が用いられる

中枢神経刺激薬は・・・

- 以前はメチルフェニデート（商品名リタリン）が使用されたが、弱い覚醒作用があり、依存・乱用の恐れがあるため、使用できなくなった
- 現在はメチルフェニデート徐放薬（商品名コンサータ）とアトモキセチン（商品名ストラテラ）が使用されている

メチルフェニデート徐放薬(コンサータ)

対象年齢: 6~18歳

剤型: カプセル状(Oros) 18mg錠、27mg錠

用量: 初回18mg、最大54mg/日

有効性: 服用後数時間~12時間

対象疾患: 注意欠陥多動性障害

服用: 朝1回

* 依存・乱用の可能性があり、処方も調剤も規制されている

アトモキセチン(商品名ストラテラ)

対象年齢: 6~18歳

剤型: カプセル状(5mg錠、10mg錠、25mg錠)

用量: 体重依存性

有効性: 服用後2~3週間で発現

対象疾患: 注意欠陥多動性障害

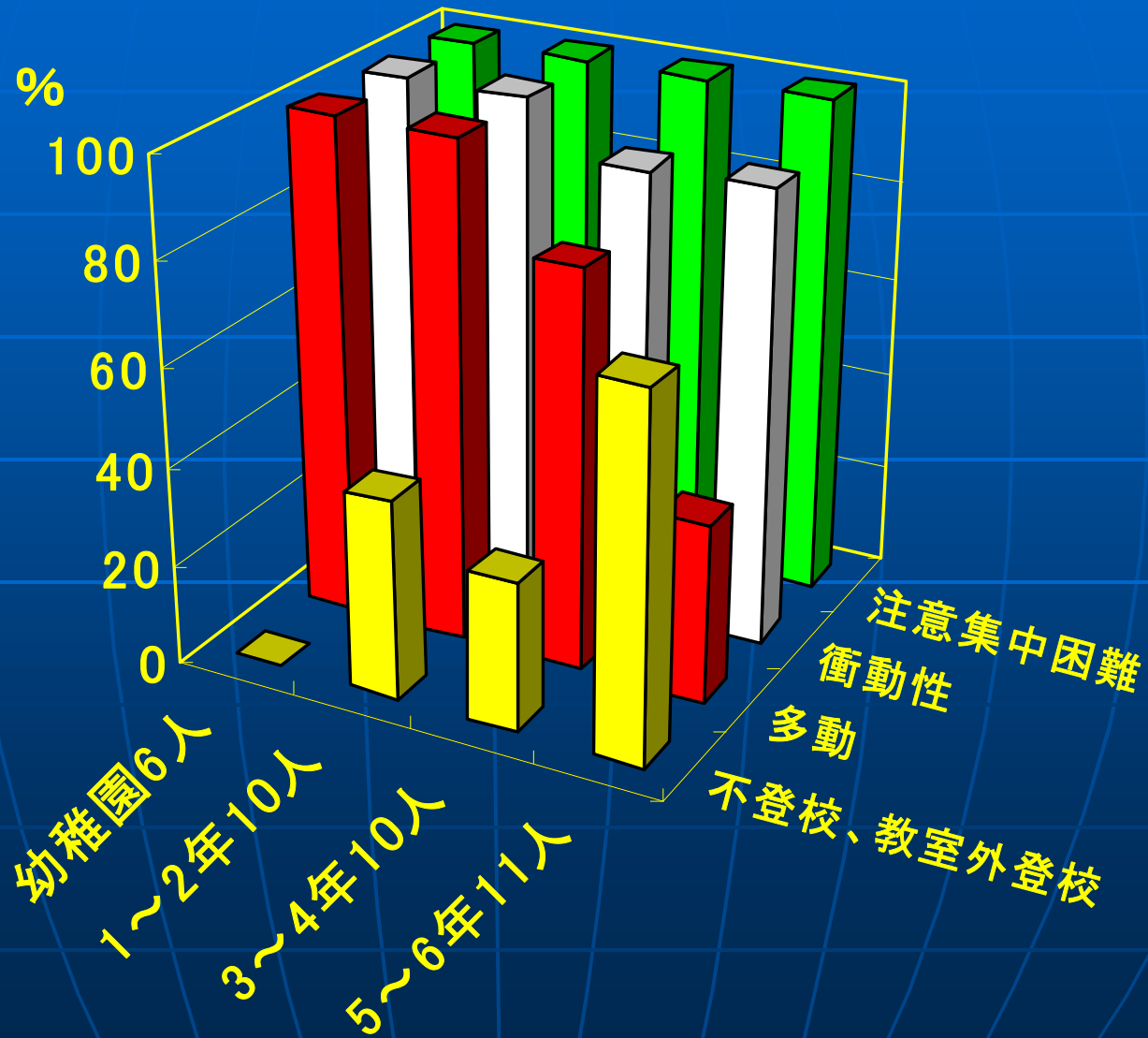
服用: 朝夕2回

* 処方も調剤も規制はない

AD/HDの経過は・・・

- ・以前は楽観視されていた
- ・対応がよくなないと、行為障害などへの移行や併発がみられる
- ・症状により、予後は大きく異なる
 - 多動はほぼ改善される
 - 注意集中困難は続く
 - 衝動性の亢進は、個別に大きく異なる

入院時学年と各症状の頻度



行為障害の経過

	小児期発症型	青年期発症型
発症時期	10才以前	10才以降
激しい行動障害	あり	なし
攻撃行動	あり	少ない
性別	男子 >> 女子	男子 ≧ 女子
仲間関係	関係よくない	関係はよい
反社会性人格障害	発展しやすい	発展は少ない
物質関連障害	発展しやすい	発展は少ない

医療とつなげるには・・・

- まず、教育の中で出来ることを考える
- 校内委員会での検討
- コーディネーターや養護教諭を介した連携
- 段階を踏んだ医療への紹介
- 校医、教育相談センターなどの利用

保護者の気持ちは・・・

- 保護者との協働を行う
 - 子どものために何ができるか
- 保護者はどう考えているか？
 - 知らなかった
 - 分かっているが認めたくない
 - 保護者の理解が得にくい
- 保護者の置かれている立場はどうか

社会におけるADHD・・・

- 特定の分野で素晴らしい業績を残した人には、子どもの頃にADHDと考えられている人がいる
- 社会的不適応のために、思春期になって、社会から逸脱する場合もある
- 子どもの頃の適切な対応により、大人になってからの様子は大きく変わる

発達障害教育情報センター 研修講義

ADHDとは何か？

—医療から見て—

終わり

国立特別支援教育総合研究所
東京都立梅ヶ丘病院 市川宏伸